
たぶん、それすらも必然で

紫條 たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶん、それすらも必然で

【Nコード】

N0222F

【作者名】

紫條 たすく

【あらすじ】

家路を急ぐ帰宅時。繁華街の真ん中で、恭太はついつかり先輩である匠に告白をしてしまう。突然の告白に戸惑う匠。忘れてくれ、と言い捨てて恭太は逃げてしまうが……。

「ばっかじゃねーのかお前」

5月、とはいえ夕方になれば寒い。それでも時間は夕飯の買い物をする人や、家路を急ぐ人、あるいはこれからいっぱい飲みに行こうか、

と浮かれるサラリーマン等々でごった返した駅前、繁華街の真ん中に、少年の何とも穏やかじゃない声が響き渡った。

当然、道行く人たちは何事かと足を止めて振り返る。

しかし、当の本人はそんな事は全くお構いなしだった。

少年の身長は170センチくらい、年の頃は17、8くらいであろうか、グレーのブレザーにエンジ色のネクタイを身につけた姿は、すぐそばにある進学校に通う生徒である事が容易に知れる。今時少々時代遅れに見えてしまう、襟足で切りそろえられたまっすぐな黒い髪は、彼の通う高校の校則故だろう。少し長めの前髪からのぞく瞳は大きくて、笑ったらきつと愛嬌のある顔だろうと思わせるが、今はきつくつり上がっている。

そんな彼が町中でいきなり罵倒した相手は、その横に片手で顔を押さえてため息をついていた。

それはそうだろう。罵倒されるにしても喧嘩するにしても時と場所等言う物があつて、こんなにギャラリー満載の所でやらなくても、と誰しも思う。顔を隠したくなるのもつともな事だ。

絶望的なため息をついている少年は罵倒した方よりも長身で、おそらく一八〇センチはあるだろうか。顔は手に覆われて見えないが、罵倒した少年と同じ制服に身を包みつつも、真新しい制服で後輩と言ふ事がわかる。

普段だったら人混みに紛れてしまいそうなこの二人が、光が丘商店街の中で今この時に限っては、一番注目を浴びていた。

怒鳴った方の少年は海野匠、怒鳴られた方の少年は藤崎恭太という。

数分前まで、彼らはごく普通の高校生らしく一緒に下校している最中だった。もうすぐ春の大型連休。そんな浮かれた気分です。

「で、どこ行く？ 映画とか？」

「男同士で映画つてのもなんか不毛……てか、恭太、お前彼女は？」

「あー……」

「また別れたのかよ。」

視線を泳がせる恭太に匠がつっこみを入れる。

「んつとに長続きしねえなあ……。好きだったんだろ？」

「いや……ええーと……」

さらに視線を宙にさまよわせる恭太。好きです付き合って下さいと、相手に言われたから付き合ってみただけ、とは言えない。

「……好きでも無いのに付き合ったのかよ」

「……付き合ってみないと好きになれるかどうかわからないし……よく知りもしないで断るのも失礼……」

「本気でもないのに付き合う方が、よっぽど失礼だよ」

至極もつともな事を言われて、恭太はますます居心地が悪い。

「お前、ちゃんと人を好きになった事あるのか？ 無いからそうやって、女の子気持ち弄べるんじゃないか？ いい加減やめとけよ悪趣味な……」

「好きになった事なんか、あるよ」

匠の言葉を遮るように、恭太はいつになく低い声で言った。

「え……？」

「いるよ、好きな人くらい。」

「じゃあなんで好きでもない女の子と付き合っただよ。お前そんないい加減な……。」

「違っついい加減なんかじゃない！ ただ、望みがない想い抱えて

ても仕方ないから、誰か他の娘と付き合えば忘れられるかも……て。

「望み無いってお前、どんなやつ好きなんだよ……。」「

匠にそう聞かれて、恭太は一瞬苦しそうな顔をする。じつと匠を見つめた後、うつむいて。

絞り出すような声で、言った。

「アンタ、だよ。」「

「恭太お前何考えて生きてるん。」「

先ほどの罵声からほとんど音量を変えずにそう問いつめられた、恭太は、それはこっちが聞きたい、と内心でぼやく。

自分の告白が原因で罵倒されているのはわかってはいても、やはり時と場所という物がある。

時と場所を考えるいとまもなかった自分の告白を棚に上げて、恭太はそう思う。

「一々何かを考えて誰かを好きになる訳じゃないし、どうしてこんな事になってるかなんて、俺の方が聞きたいくらいで。」「

まして相手が男となったら、話はどう考えたってなかなかハッピーエンドに向かわない事くらい重々承知していたし、だからこの思いを自覚してからは絶対に、ばれないようにと気を張っていた。はずだった。

等と言う事をぐるぐる考えたところで話は全く前に進まないのはわかってるし、こうなったら場所が悪いとか、他の所へとかそんな事を言っても、納得する相手でもない。

被害を出さないためにも、恭太は口元を押さえ極力小さい声で、

「……俺がアンタ好きだってのにそんな長ったらしい能書きでも必要?」「

返した言葉はもう、いっそ潔いほどの開きなおりっぷりだった。

「好き……って、あのなあ……お前それっ、わかって、俺……っ」
さすがにすべてをおおっぴらには語れないのか、絶句気味に返ってきた言葉は、好奇心いっぱいに聞き耳を立てているギャラリーに伝わり、ざわめきが広がっていく。

いきなり男に告白されて、焦るのは仕方ないにしてもここまで罵倒されて何考えているのかわからない、と言う顔をされたら望み薄だな、と恭太は判断する。

とりあえず、結果どうあれこれ以上この場に残りたくないのは山々なのだが、たとえばここで相手の手を残して自分が逃亡すれば、さらに好き勝手な憶測が広まるのだらう。

そしてここはどこで学校関係者が見ているかわからないし、おそらく知り合いの一人や二人はいて、家に着く前には絶対おしゃべり雀の口から親兄弟の耳にはいるのも確実だ。

ならば、きつちりはつきり、振られる所まで見せてやろうじゃないか。恭太は腹をくくると、口元に笑みが混じる。もちろん、苦笑だが。

しかしそれをどう誤解したのか、匠はさらにむっとした顔になった。

「何笑ってんだよ。てか、笑うところか？　これ。」

怒ってる。完璧に怒ってる。そんなのは恭太にだって良くわかっている。ふざけているとでも思っているのだらう。そんな姿も可愛い、とか思えてしまう恭太もかなり末期的なのだが。

「……まさかお前、俺の事からかつたんじゃないだらうな？」

今から実はそうでしたと言ったら、この騒ぎはチャラになるだらうか。

否。

他の誰がそれを許しても、目の前にいる自分の思い人は白黒はつきりさせなければ納得してくれない相手である事を、恭太自身が一番よく知っていた。

そして、白黒はつきりさせたいのは自分もだ。こんな所ではつき

りさせる事になるとは思いませんでした。

「違う。」

「へ？」

不意に笑いを止めて返った言葉に、匠はきょとん、として聞き返す。聞こえなかったらしい。だからといって、ギャラリに聞こえてしまふような声で物を言うつもりはなかったが。

「からかってないです。ここで言うつもりはなかったけど、まあ、結果的に口から出てしまった事を否定するつもりないから……けど。」

一拍、深呼吸をして。

「これで、終わりにするから。」

「おまえ、何いって……。」

覚悟を決めた恭太の勢いについて行けなくて、匠は若干戸惑ったような雰囲気を感じさせる。

けれど、待つ気はなかった。

「今の態度で、十分、返事になったから。明日からいきなり好きなのやめまして訳にいかないけど、そういうのにじませないようにするから。てか、忘れて。今日の事、全部。アンタの友達ってポジションンまで降りる気は、ないからさ。」

一方的な宣言にあっけにとられた匠の口が『待て』と動き出す前に、恭太は、自分の言いたい事だけを言うとその場を逃げるように去っていった。

生まれた時から死ぬまでの行動は予めDNAにインプットされている。

そんな言葉をいつだったか、匠が言っていた。それが本当だとしたら、今ここで自分が失恋するのは、しかも相手が男だったりするの、さらに衆人環視の元だったりする事さえも、DNAに組み込まれていた事なのだろうか。（そして、あの場に居合わせてしまった人達のDNAも……）

なんて事を考えたところで起こった現実是不変ならない。あの場所はおそらく学校関係者も目撃しているだろう。

明日登校したらどんな騒ぎになっているか。いや、そんな事はいい。幸い恭太の声は周りにほとんど聞こえていなかっただろうから、どのようにもごまかせる。

ごまかせなかったとしたところで人の噂も七五日、そのうち飽きるだろう。

それよりも問題は、匠だ。無かった事にしてくれ、と逃げてきたが、果たして忘れてくれるだろうか。

おそらく無理であろう。匠が、あれで納得するとは思えない。絶対、明日顔を合わせればなにやかにやと問いつめてくるだろう。

それを考えると憂鬱になりながら、恭太は自宅のドアを開ける。

「ただい……」

「恭太！ アンタホモになったんだって？！」

「お兄ちゃんやめてよ往来で恥ずかしい！」

帰宅の挨拶を言い終わりもしないうちに、玄関で待ち受けていた母と妹の言葉に、恭太はがっくりと首をうなだれた。耳に入っているだろう、とは思ったが……。思わずその場にめり込みたくなったが、沈黙すれば好いように解釈されるだろう。

たとえ二人の言っている事が真実に近いとしても、今ここでそれ

を肯定するわけに行かないのだ。

「誰がホモだよ……変な誤解やめてもらえる。」

「だって聞いたわよ。光が丘商店街のど真ん中でなんだか男の子と
もめてて好きがどうこうとか……。」

「誰に。」

「お向かいの奥さん。たまたまお買い物中に見たんですつて。携帯
から電話あったのよ。今は情報はリアルタイムなんだから。」

メール一つ打つのに大騒ぎしているくせに、何がリアルタイムだよ、
これだから主婦ってやつは……。と、恭太は心の中で悪態をつく。

「ちよつとした意見の相違でホモにされたらたまらねーっつの。単
純に向こうが嫌がる事を、俺が好きだっていったもんだから、怒り
だしたただだよ。」

「本当に？　なんか尋常じゃない雰囲気だったって聞いたけど？」

「本当だよ。つたく、この調子じゃ近所中で俺はホモだって言われ
そうだな。母さん、ちゃんと否定しておけよな。」

そう言うときまだ納得していない様子の母をおいて、恭太は自室に向
かう。

「待つてよお兄ちゃん。」

二人のやりとりを横で見ていた妹の優衣が、後を追いかけてくる。

「なんだよ、まだ何か言いたい事あるのか。」

「……入っていい？」

何か言いづらそうに視線をさまよわせる優衣。

「……汚いとか騒ぐなよ。」

適当にあしらっても引いてはくれなそうな姿に、恭太はため息をつ
いて言うとき部屋の中へ誘った。

「で？　母さんに聞かれたくない話か。」

手に持った学生鞆をベッドの上に投げて、悠太はブレザーを脱ぎ捨
てる。

「……ハア……。」

優衣はため息をつくとき、それをその辺に落ちていたハンガーに掛け、

クロゼットに入れた。いつもなら山のような文句が出そうだが、部屋に入るときに騒ぐなど言われたせいか、黙ったままで。

「……海野さん、でしょ？」

「あ？」

いきなり、優衣の口から匠の名前が出る。何度か恭太の家にも遊びにた事があるから、妹もその名前を知っていた。

「お兄ちゃんが振られた相手。」

「あの子、さっきの話聞いてなかったのか？」

「あんな見え透いた嘘、信じられるわけ無いじゃない。母さんだつて、だまされてる振りしてあげてるだけよ。」

そう言い切つて、もう一度溜め息。

「お前、身内にホモになつて欲しいのか？」

「そうじゃないわよ！」

強く言い切ると、きつと恭太を睨み付ける。

「そうじゃないけど、なんとなく話聞いた時、海野さんの名前が浮かんだのよ。」

「なんでそうなるんだ？ 妄想力逞しいな。俺はいいとしても、勝手に先輩をホモにするのはどうかと思うぞ。」

妹の思いこみを何とかやめさせようと、恭太は混ぜ返すように軽い調子で返す。それでも、優衣は引く様子を見せなかった。

「何でおにいちちゃんはいつもそうなのよ！ 自分の事にはぜんぜん興味なくてどうでも良くて、人の事ばかり……。」

「優衣……」

「いつだって、別にいいよって、なんにも興味のない顔して、何かを選ぶときだって私を優先してくれるけど、本当に欲しくなくて言っているのか、我慢してるのか、わからないの。我慢させてるんだとすれば、それは私なのに……。」

「別に我慢なんてしてないって。」

「……女の子と付き合つて別れた時だってそうじゃない。相手の子がお兄ちゃんの事好き勝手言いふらしても気にしてない、言わせて

おけつて。いっつも、自分の事はどうでもいいって、そういうのを私小さい頃から見てきて。」

始めの勢いはどこへやら、優衣の声はだんだん小さくなる。

「初めて、海野さんつれてきた時に思ったのよ。こんなお兄ちゃん、私知らないって。」

「別に普通にしてただろう？」

「自覚無いの？ 海野さんと話してるときお兄ちゃん、すごい楽しそうだった。活き活きとしてたし、二人とも遠慮無く言いたい事言い合ってる感じがして、私二人の会話に全然入れなくて。その時思ったの。あ、お兄ちゃんこの人の事好きなんだって。」

「だからどうしてそうなる……。」

「もちろん変な意味じゃないわよ。友達として、だと思ったの。なのになんてかな、今日お向かいのおばさんの話聞いたときに、海野さんだろうな、ってわかったのよ。そうなんでしょ？ お兄ちゃんさつき否定しなかったし。」

否定しなかったわけではなく、いきなり名前を出されてとつさに反応できなかったただけなのだが。

「お兄ちゃんにホモになつて欲しい訳じゃないけど、何となく、あの人ならしょうがないかなって。お兄ちゃんとられても。」

「……つたく、考えすぎだよ、全部お前の。」

「でもっ……。」

「もう馬鹿な事考えるなよ、な？ 別に俺は、お前が言つたような事全然考えてもないから。ほら、着替えるから出て行けよ。」

強引に話を切り上げようとする恭太に、優衣はまだ何か言いたそうに視線をよこしたが、しかしそれ以上は言おうとせずに、

「……わかった……でもお兄ちゃん、忘れないでよ。誰が何言つても、私もママも、お兄ちゃんの見方なんだからね。」

それだけは忘れないでね、と念を押し、部屋を出て行った。それを見送って、恭太は疲れ果ててベッドに身を投げる。

「ガキだガキだと思つてたんだけどなあ……。」

思いもかけなかった妹の言葉。

嘘をついた自分。我慢なんてしてないと。それは妹を思うが故の嘘で、そう言った事を後悔してはいない。してはいないけれど……

恭太は、3人兄妹の2番目の子供として生まれた。上に兄、下に妹。兄とは5歳、妹とは2歳の年の差。

物心が付いた頃にはすでに妹がいて、まだ乳飲み子だった妹に母は付ききりで、甘えたくても甘えられなかった。

「お兄ちゃんだから我慢してね。」

その一言で、何も言えなくなった。自分の我が儘や望みは押さえる物。

そうして過ぐすうちに、恭太は自分を押さえる事、諦める事を覚えた。そんな恭太の対外的な評価はいつだって、「物わかりの良い、聞き分けのいい子。」

身に付いた習慣は家の外に出ても同じで、どこに行ってもそう言われ続けて。気がつけば自分の事には無関心で周りの意見を優先させる事が多かった。

けれど本当は、もっと親にだって甘えたかった。欲しい物を欲しいと言いたかったと、そうだかをこねる、我が儘で底意地の悪い自分がいる。

十数年間かぶり続けた猫は、気がつけば恭太自身が自分の真意がわからなくなるほどに大きくなって、最近では自分の本当の望みすら見失ってしまいそうだったのに。まさか優衣にそんな自分を見透かされているとは思っていなかった。

『海野さん、でしょ。』

まさか、たった一つ譲れないと思っていた想いまでが、見透かされていたとは。

「めんどくせえ……。」

あの場面をあれだけの人間に見られていた事も、妹の突然の指摘も。明日からの学校生活の事も何もかもめんどくさいと。

そう呟くと、恭太は瞳を閉じた。

海野匠、と言う少年に出会ったのは3年前。中学3年の時だ。

。中高一貫教育で知られる私立西華学園の入学式。恭太は中等部2年で、匠は高等に外部入学したばかりで。

中等部と高等部合同の入学式で、在校生は迎える立場として強制的に参加。通り一遍に行われる式は、毎年同じ内容で退屈する。とはいえ、元来決まっている事を無視できる性格でもない恭太は、かつたるいと思いながらも講堂へと渡り廊下を歩いていった。

朝に弱いため遅刻ギリギリで登校したおかげで、クラスメートはすでに式に向かった後。遅刻する事自体は気にしないが、それに付随する担任のお説教が嫌で、慌てて走っていた時に、講堂の方からやって来た少年にぶつかった。

前方不注意による正面衝突。気づいていなかったのはお互い様だったと思う。

にもかかわらず、相手は

「いつてえ！ 走るならちゃんと前見るよな！！」

と、思い切り怒鳴ったのだ。

この頃はまだ恭太も背が伸びる前で匠とそう身長が変わらなかった。お互い頭を思い切りぶつけ合い、額を抑えながら相手を確認する。

見た目だけでは年上か年下か図りかねたが、真新しい制服に胸につけた白い造花で、本来ならここにいていいはずのない、新入生である事は見て取れた。

「……なにやってんの？」

謝る事すら忘れて、恭太はそうつぶやく。

「はあ？ お前とぶつかったんだろ、見てわかんねえ？」

「や、そうじゃなくて……。講堂に行かなくていいわけ？」

「式？ ああ、かつたるいから抜けてきた。つか、お前、謝るくら

いしろよ！」

絶対的に恭太が悪い、と言い切るその態度もさる事ながら、悪びれもせず入学式をさばると言い切るその態度が、恭太には信じられない。

そんなに面倒ならはじめから登校しなければいいのに、等と言えば、目の前の相手はおそらく更にに怒るのだろう。

「あーごめん、けどそっちも……。って、あんた中等部？」

仕方なく謝りつつの恭太に、

「高等部だっ！！ ついでに俺の名前は、海野匠だ！！」

怒る匠に、こんなに気が短かったら、人生疲れそうだなあ、と恭太は思ったのだった。

ちなみに、この後もちろん式には遅刻し、恭太は結局担任のお説教を聞く事になった。

匠は、眠くなりそうな事はごめんだ、と遅刻しつつも式に向かう恭太とは反対方向に駆けていき……。のちほど職員室でみっちり絞られる羽目になるのである。

海野匠の名前は、校内で有名になった。それはそうだろう。入学式をさばった、なんて事は前代未聞だ。

とは言え、高等部と中等部に分かれている恭太と、匠の接点はほとんど無いに等しい……。はずだった。

にも関わらず、何故かやたらと接触する事が多かった。まずは掃除当番。西華学園の掃除当番は、各教室以外の場所は縦割りでグループが決められる。入学式の数日後、くじで決められた掃除場所です二度目の遭遇を果たす。

「めんどくせえ……。」

掃除用の竹箒を片手にそう呟きながら恭太ぼーっとしていた。

「ちょっと、真面目にやってよ。」

見とがめたクラスメイトの古居清美がヒステリックに声をかける。何故か中学入学から同じクラスの彼女は、恭太のそれなりに親しい数少ない友人である。

小柄で陸上部のエースである清美は、どちらかと言うとかわいい、愛嬌のある顔つきをしていた。髪の毛は少年のように短かったが、大きな目と愛らしい口元のせいか、性別を間違えられる事はない。むしろ、そのさっぱりとした性格で誰にでも好かれていた。

その清美と親しいと言う事で、やっかまれたり付き合っていると噂されたりしたが、恭太にしてみれば冗談ではない。お互い恋愛の対象だと思った事は一度たりとも無いのだ。

「やってられっかよ……裏庭の掃除なんて。したってしなくたって大してかわらねーし。」

「そこでもーっと立っていられると邪魔なのよ。」

清美はそういいながら、わざと恭太のいる辺りを箒ではいた。埃が舞って、恭太がたまらず後ろに避けた、その時。

「いてえ。」

誰かにぶつかった。いや、踏んだと言うべきか。

「え……？」

後ろを振り向くと、ジャージ姿の少年がちりとりを持って座り込んでいた。踏んだのは、その足だったらしい。

「あ、すみません。」

何故か足を踏んだ恭太より先に、清美が頭を下げる。そして、肘で恭太をドン、と押した。

「あ……すみま、せん……。」

「あのさ……お前、俺にぶつかったり踏んだりするのが趣味なわけ？」

「え……？ あっ……。」

恭太はなんの事かわからず相手の顔を見返す。そして思い出した。入学式の日にぶつかったあの少年だ。

「しかも彼女に先に謝らせるって……。」

「彼女じゃありません！」

恭太と清美が同時に、否定の言葉を叫ぶ。匠は一瞬面食らった顔をしたが、

「ぶっ……お前ら、そんな思いつきり同時に……おっかしいやつら。」

足を踏んだ事はもう忘れてしまったかの様に、笑う。

「ま、いいや。お前らもこの掃除担当？ てきとーによろしくな。」

そう言つて立ち上がると、んじゃねーと手をひらひら振つて匠は教室へと行つてしまう。

「……ねえ。」

「あ？」

「……さぼり……？」

清掃終了のチャイムは、まだ鳴っていなかった。

掃除の一件からしばらくした、放課後の図書室。恭太は教師に授業に使つた本を返すために立ち寄つた。本を読んでいるよりは外で身体を動かしている方が性に合う恭太は、こういった用事でもなければ、図書室になど足を踏み入れたりはいしない。

司書の担当教諭に本の陳列場所を聞き、林立する本棚の中向かう。と、指定された一番奥の棚の窓際に床に座り込んで眠り込んでいる匠の姿を見つける。なるほど、この場所なら死角になつていて、思つ存分昼寝が楽しめそうだ。窓から差し込み日差しがまともに顔に当たつて暑そうではあつたが。

恭太は手にした本を棚に戻すと、そつと近くにより窓のカーテンを閉める。

「ん……。」

と、匠が気配に気付いたのか身じろぎをすると片目を開けた。

「あ、すみません、起こしちゃいました？」

本当はさっさと立ち去ろうと思っていたけれど、ばつちりと視線が合ってしまったてはそうもいかない。

「……変なやつ。」

親切にも日差しを避けてやろうとした相手に、匠は失礼な事を言い放つ。

「普通さ、こんな所で何やってるんだとか言わない？」

「……俺、別に図書委員でも風紀でもなんでもないですし。」
しれつと言い放つ恭太に、匠はぷつと笑った。

（笑うと印象変わるなあ。）

掃除の時にも想った事。少しきつめの匠の顔が、笑うとなんだか可愛くなる。年上とは思えないほどに。

「なんか良く顔あわすけどさ、なんだっけ、名前。」

「中等部2年の藤崎恭太です。」

「あ、年下なんだ。俺は……。」

「海野匠先輩、ですよ。ね。高等部一年の。初めて会った時、聞きました。」

「あーあん時なー。」

そっぴや言ったっけ、と一人ごちながら、匠は立ち上がってぐーつと伸びをする。

「あのさ。その先輩って言うのやめない？」

「え、でも先輩ですし……。」

「たかが一歳の差でがたがた言うなっつ。それにその敬語もなんかやだ。おれ、堅苦しいの嫌い。」

「えーとじゃー……海野さん……。」

「やーめーろー！！ サバイバたっ！」

よほど嫌なのか、がんと足を踏みならしつっ嫌がる匠に、恭太は困って首をかしげる。じゃあなんと呼べばいいのかさっぱりわからない。

「匠でいい、匠で！　で、敬語禁止な！」

びしつと人差し指を突きつけて宣言する匠がおかしくて、恭太はぷつと吹き出した。

「……くく……、て、てか、アンタ無茶すぎ……。」

「何がだよ。」

「や、だつて……アンタ誰にでもそんな？」

「悪いかな？」

「悪くないけど……。」

かなり破天荒だ。これくらいの年頃はたった数ヶ月の差でも先輩後輩と騒ぎ立て、威張りたがる輩も多いというのに、この態度。

貴重と言えば貴重だが恭太には壮絶にももしろかったし、興味深かった。

先輩後輩の垣根を越えるなど、恭太の思考ではあり得なかったし、だからこそ呼びつけなどもつての他だと思っていたのに。

「アンタ、おもしろすぎ。」

「わあるかったな。俺にしてみりゃ、お前も十分おもしろいぜ？」

「どこが？」

「わざわざカーテン閉める所とか。今のその反応も十分おもしろい。」

「普通力一杯笑われれば気を悪くする所だが、匠は全く気にもとめていない。」

「じゃあ、お互い様って事で……。ただですね、先輩？　他の連中の手前堂々と呼びつけつてのもどうかと思うので……とりあえず、二人の時だけって事で、勘弁してもらえませんか？」

恭太はそういつて悪戯っぽく目配せる。

「しゃーねえな、それでいいわ。」

「りょーかいです。じゃ、俺の事も恭太って呼ぶって事で。匠？」

それでいいよ、と匠が笑った。

何故か、その笑顔に心が浮き立った。

それから二人は、示し合わせているわけではないのに校内で出会う機会が増えた。

学食で出会えば、当然のように一緒に食事をし、登下校の最中に出会えばたわいのない事を話ながら一緒に歩いた。

中等部と高等部、不思議な取り合わせの二人に、周りの人間は首をかしげたが、当の本人達でさえ、何故こつも接触が多いのかわからなかった。

付き合ってみれば、匠が自分と正反対な性格である事はすぐに知れた。先ず、言いたい事をいい、人に遠慮などしない。気が向いた事には全力でぶつかっていく。納得のいかない事は絶対にしない。

二言に目にはめんどくさいと呟き、すべてにおいて適当に手を抜く恭太から見れば、疲れる性格に見えた。

なのに、何故かウマが合う。

「しいて言えば、偶然なのかな。」

「何が。」

昼食を食べ終わり、ジュースを飲みながら呟く恭太に、匠はうどんを食べる箸を休めず視線をあげて問いかける。

「いや、良く会うよなあ、と思つて。」

「世の中本当の偶然なんてそんなに転がってねえよ。」

どんぶりを空にして、箸を置くと匠はそんな事を言った。

「じゃあここで一緒に昼飯喰つてるのも全部必然だつて?」

「DNAに組みこまれてるんだつてさ。生まれてから死ぬまでの行動。なんかの雑誌に書いてあつた。」

「……それ、女口説く特に使つた方ががいいと思う。」

憎まれ口を言う恭太に、うるせ、と言り返した時、

「相変わらず仲がいいわねえ。」

座っている二人の頭上から声が振ってくる。

「なんだ、古居か。」

清美が学食のトレーを持って立っていた。

「やんなっちゃう、混んで。藤崎、隣空いてるならすわっていい？」

断る理由もなくて、恭太はうなずく。しかし本当は、匠と二人で話していたかった。

「海野先輩、失礼します。」

恭太には見せないような笑顔で、清美は女の子らしく笑って椅子に座った。

『あたし、海野先輩ってタイプかも知れない。』

そんな事を、いつだったか清美は本人を前に言っただけだ。

その場にいた恭太はこいつはいきなり何を言うのだと焦ったが、匠の方は動揺もせずに

『でも俺古居みたいなタイプって女として扱えないわ』ときっぱり返していた。

速攻失恋でどうなのよ、と清美は冗談っぽくぼやいていたが、それでもその後匠を避けるでもなく、恭太と共にいる時などに話しかけている。

匠の方も時に意識する様子もなく、普通に対応していた。

「お前、良く喰うな。」

コロッケ定食に素うどんがのったトレイの上を見て、匠が呆れ顔の匠。

「あら、だって私部活もあるし結構カロリー必要なんですよ。大会近いし、しっかり食べてしっかり練習しなきゃ。」

けろっとして言い返す清美に、匠はなるほど頷いた。

「所で先輩、さっきのDNAの話、本当ですか？」

「俺は専門家じゃないし、そんなの知らないよ。雑誌で見ただけ。古居そんなの興味あるの。」

「だってロマンチックじゃないですか。それっていつか会える恋人も生まれる前から決まってるって事でしょ？」

こういう所は女の子らしく、清美はうつとりした顔をする。

「女ってすぐそういう事言うなあ……。たとえば明日学校遅刻したりとか、古居が風呂入るときどっちの足から入るとか、そんな事もDNAで決まってるとしたら、全然ロマンチックじゃないんだけど。」

「風呂……って、やだ、先輩……。」

真っ赤になる清美を横目で見ながら、恭太はおもしろくなかった。

清美の事は嫌いじゃないが、彼女が匠との間に入ってくると何か疎外感を感じてしまう。

今もこの会話に割って入りようがない。清美は食事をしている間席を立つ事はないだろうし、ここにいてももう、何か話す事もないような気がした。

「俺、先行きますね。」

他の生徒がいるときは先輩扱い。そのルールに則って敬語でそう言っただけ。

昼休みも半分の時間が過ぎたとは言え、こった返した学食の中。席に座って友達と談笑をしている生徒達を見ると、少し寂しくなるけれど、ここにいたら清美に邪魔だとか言い出しそうだから。

「藤崎？」

いきなりどうしたんだ、と言いたげに呼びかける匠を無視して、その場から足早に立ち去った。

学食や図書室、職員室などがある棟から中等部へ向かう渡り廊下を、恭太は足早に通り過ぎる。

（なんで俺、こんなにムカムカしてんだろ……）

清美とはずっとそれなりに仲が良かったし、友人を挟んで話を事は、なんて事無いはずなのに。

自分には見せない「女」の顔で匠に接する姿に、本気で虫酸が走

った。

（俺……古居が好きなのか……？）

と考えてみて。恭太は知らず首を振る。考えるだけで背筋が寒い。あり得ない。

「ちよつと待てよ！」

首を振っている恭太を、誰かが呼び止める。振り返ると、匠がいた。寒くなりかけた気持ちちがその顔を見るだけで暖まる。

「お前、いきなり勝手に行くなよ。どうしたんだよ一体。」

「え……いや、別に……」

「嘘付けよ。」

「本当になんでもないって……てか古居は？」

いくら何でも食事を一人でさせているのはかわいそうでは、と言いそうになった時。

「あのさあ！」

匠が声を荒げた。

「言いたい事があるなら言えよ！」

「は？」

「自覚無いわけ？ いつもいつも何か言いたそうな顔をして、でもあきらめた表情で、そうやって一人でなんでもないって言ってるけど。言いたい事があるなら言えよ。」

「別に、言いたい事なんて……。」

「嘘付けよ。今だって思い切り不満たらたらな顔してしてるくせに。なんでそんなに自分を押さえてばっかなんだよ。欲しい物があるならあきらめるな！ 俺ら子供はもつと我が儘でいいはずだろ？！」

匠らしく言い切った言葉に、恭太は目を見張る。

今まで物わかり良く、聞き分けよく、そう育ってきた中で、だれもそんな事をいってはいけなかった。

初めて言われたその言葉に、なんと返していいかわからなくて、恭太は絶句する。

「っってお前、何泣いてるんだよ？！」

「あ……え……？」

指摘されて初めて気がついた。しかし止めようと思っても止まらなくて。

「しょーがねえなあ。肩貸すから5限始まる前に涙出しきっちゃえ。」

いい年して、と蔑むでも笑うでもなく、匠は恭太の頭を抱いて自分の肩に乗せた。

恭太は、声を出さずに肩をふるわせて泣いた。誰かに見られているかもとか、そんな事は一切考えずに。

たぶん、こんなに泣いたのは赤ん坊の時以来だっただろう。

そしてこの時気付いた。この人が、好きだと。

慣れない事はする物じゃない、と恭太は思う。

欲しい物は欲しいと言っている。そうだったのは匠だった。

うっかりと出してしまった言葉はやはり、恭太の思うようにはいかない。欲しい物は手に入らない。

一晩中眠れずにいたから目が赤い。洗面台の前で恭太はため息をつく。

「お兄ちゃん。」

控えめに、優衣が声をかけてくる。

「よお。なんだ？」

いつも通り、何もなかった顔で明るく答える恭太に、優衣は表情を曇らせる。

「目、赤いよ。」

「あ？ ああ、夕べちよつと徹夜でDSをな。」

「私じゃ、相談に乗れない？」

「ばーか。そんなせつば詰まった問題も無いっての。」

優衣が本気で心配しているのはわかったけれど、長年培った「お兄ちゃん気質」はそう変わる物じゃない。第一、妹に弱みを見せるなんてかっこ悪い。

「遅刻するぞ、早くしないと。」

ぽんぽん、と優衣の頭を軽く叩くと、恭太は玄関に向かった。

期待を裏切らないにも程がある、と。

自宅を出た瞬間恭太はめまいがするかと思った。”行ってきます”の言葉を言いつつ視線を外に向けた瞬間、そこに匠の姿を見つけたからだ。

相変わらずのきつい瞳と視線が合った瞬間、恭太は絶句する他になかった。

「どうかしたの？」

様子がおかしい恭太に、母親から声がかかる。

「なんでもない、気にしないで。」

昨日の今日だ。匠の姿を見たら母親にどんな誤解されるかわからない。恭太は嘘くさいと言われそうなくらい、とびきりの笑顔を作ると、

「おはよう。」

と、匠に声をかけた。これには匠も虚をつかれたようで、

「……はよ。」

フイ、と視線を外してぶつきらばうに答える。それきり、何から話そうかと、思案気に黙り込んでしまった。

「とりあえず、遅刻するから。」

そう促すと、恭太は匠の横に並んで歩こう、と促す。それが、いつも通りのはずだから。わざわざ迎えに来たのは初めてだったけど、登校途中で出会う事があれば、並んで雑談しながら歩くのが常だった。

しかし今、横に来た恭太に対してびくつと匠は肩を揺らす。それに恭太は気がつかない振りをした。昨日の事は無かった事にする、と決めていたから。

かまわず歩き出したが、匠はそのまま動こうとしない。

「……どうかした？ 本気で遅刻するけど……今日はさぼるつもり？」

「おまえっ……っ」

振り向いて、何食わぬ顔で声をかける恭太を、匠はきつと睨み付ける。

「どういっつもりだよっ！」

周りに憚ってか、大声を出しはしなかったものの、十分に怒気を含んだ声で問いつめられて。

「どういっつもりって……？」

匠の言いたい事を十二分に理解しながら、恭太は敢えてわからない

振りをした。

それが、火に油を注ぐ行為だと言う事は、十分にわかった上で。

「とぼけんなつ……昨日の事……！」

案の定、ぶち切れた匠には、すでに周囲を気にする余裕など無くなつたようだ。少し前にいた恭太に詰め寄ると、襟首に掴みかかつてくる。

「昨日？　なんかあつたつけ。」

それが最低な行為である事を重々承知した上で、恭太はとぼけ通す。そうすると、昨日言つたはずだと、掴みかかる匠に視線だけで告げて。

「お前、何考えてるんだよ……。」

蒸し返すつもりはない、そんな気持ちが伝わったのか。匠は困惑した顔をする。

「普通に、オトモダチしたいって、それだけけど？」

我ながら白々しいせりふだと思いつつも、自分と匠の間にあるか細い縁を切るまいと、答える。けれどそれが逆効果だったらしい。

「オトモダチ？　あんな事言っておいて？」

「だから、あんな事つてな……がつ……」

どこまでも空とぼけようとする恭太の顎に匠の拳がヒットした。襟首を捕まえていた指が離れ、恭太は反動で尻餅をつく。

「ふざけんな！　ほんつと、冗談じゃねえよ！　おれがどんな気持ちで一晩過ごしたと思つてんだよつ！　無かつた事にしろだ？　こちとら一度聞いた事を一瞬で忘れられるほど器用にできちゃいねえよ！」

こつちもそう器用じゃない、と恭太は内心で呟きながら、立ち上がる。

切れた匠の声はもう、遠慮会釈無く大きくなっていて、幸い周りに人はいないが、いつ誰が出てくるかわからない。どうするにしても、ここでのまま話をしているのは得策ではない。

「あのさ、話があるのはわかったから、とりあえず人気のない所に

移動した方がいいんじゃない？ 騒がれても面倒だし。」

恭太自身も努めて冷静に、とは思っても、この先頭に血が上れば何を口走るかわからない。そんな所を家族に見られるのはごめんだ。

「…… 人気がない所ってどこだよ。」

「昼休みに、屋上。」

自宅から学校まではたいした距離はないし、この辺りは住宅街で、人気のない所など見つけるのは困難だ。

それなら、学校に行ってしまった方が、人目を避けるのは容易。

「なんで昼休みなんだよ。」

「…… 頭、冷やした方がいいし。お互いに。」

「おまえ、逃げるんじゃない？」

「逃げないから。」

約束は守る、と言いきる恭太に、匠は渋々頷いた。

本当は逃げたい気満々の恭太だった。

案の定、登校した途端に恭太はクラスメイトに囲まれた。口々に昨日の事を聞いてくる。うつつしいとは思っても、恭太の口から説明しなければ納得しなさそうな連中に、恭太は昨日母親に言ったのと同じ言い訳をした。

匠の方も何か聞かれるかも知れないが、あれだけの不機嫌オーラを出している匠が、まともに答えはしないだろう。必然的に、恭太の言い訳が校内に広まる事は時間の問題だった。

それで、全員が納得するとは思えなかったけれど。

時間が止まってしまえばいいのに。

退屈な授業、眠ってしまいそうな教師の声。昼休みの事を考えると、とてもじゃないが勉強に身が入るわけが無くて、恭太はふと視

線を横に向ける。クジによる席替えで決まったその席は、窓際の一
番後ろ。校庭がよく見える席だった。

視線の先、体育の時間なのか体操服姿の匠が見える。この席に
なつてからこんな事が良くあった。

基本的に気が向かない事は徹底的にやらない匠だが、体を動かす
事は好きらしく、体育の授業の時は活き活きとしていた。そんな姿
を見るのが、この席になつてから恭太の密かな楽しみだった。

しかし、今日は様子が違う。

もとより細身の体は体操着の中で泳いでいるようで、頼りない。
けれどそれだけではなく、遠目に見るその顔はいつもよりも白く見
える。その上、動きも緩慢だ。

（体調でも悪いのかな。）

恭太がそう思つた瞬間。

匠の体がふらついたかと思うと、その場に崩れ落ちるように倒れ
た。

周りにいた生徒達と、体育教諭が慌てて走り寄り、あつという間
に匠の姿は見えなくなる。しばらくして、クラスメイトに背負われ
て運ばれる姿。恭太はさらに落ち着きを無くし、今すぐにでも保健
室へかけていきたい気持ちになる。

それからの数十分、授業は全く身にならなかった。

授業終了のチャイムがなり、授業終了の礼をおさなりにすると、
恭太は教室を飛び出した。行き先はもちろん、匠が運ばれたであろ
う保健室。

何しに來たのかとか、帰れとか、そんな事を言われるかもしれない
けれど、じつとしていいる事なんてできなかった。普段健康優良児
の匠が倒れるなんて、きつとよほどの事だ。

事と次第によっては、昼休みの約束もなしにしなければならぬ。
何より、匠自信の身体の方が心配だった。

勢いだけで保健室の前まで行き、足を止める。今、匠が一人でい

るのか、それとも誰かが付き添っているのか。それによって恭太も対応を変えなければいけない。一人でいればいいのだけど。

そう思ったとき、中から声が聞こえた。

「寝不足で倒れるってお前、間抜けすぎ。」

低く通りのいい声は、確か匠のクラスメイトの声だ。それに、匠の声が応えた。

「悪かったな、桂。」

「おう、自覚してるならいいけどな。倒れるほど寝不足って、何していたんだよ。」

「……………」

返事をする気がないのか、応える匠の声はない。

「いいけどな、別に。病気とかじゃないならさ。けど、あんまり心配させるな。保険医、ちょっと会議で留守するけど、少し寝て行けって言ってたし、休んでいけば？」

「うん……………」

おそらく、本当に匠を心配しているであろうその言葉に、素直に頷く気配。

「じゃ、俺授業始まるから行くな。」

桂がドアに近づく気配がして、恭太は慌てて一歩後ろに下がる。

ガラリ。

引き戸を引いて出てきた桂と、まともに目があった。

桂は長身で、軽く一九〇はあるだろうか。運動部に所属しているだろうと推測できる、健康的に焼けた肌。黒くて短く刈り込んだ髪に鋭い眼光。鼻筋の通ったきりつとした口元。かなり迫力のある風貌で、恭太は一瞬気押される。

匠と一緒にいるところを数度見かけた事はあったが、まともに会うのは初めてだ。おそらく自分の事など知らないだろうと、恭太は軽く会釈だけして保健室に入ろうとした。

「あれ。お前、匠と良くつるんでるよな。」

すれ違いざま、桂に止められる。

「あ、はい。」

「何の用？ どっか怪我でもしたわけ？」

桂の言葉には、何故か棘が含まれている。恭太と匠の間にあった事を知っているとは思えないのに、何故。

嫌われたり恨まれたりするには、接点もないのに。

「た……海野先輩が、倒れたのが見えたんで……。」

「心配できたわけ。てかお前、匠の何？ どういう関係？ わざわざそんな事でここまで来るほど親しいの？」

ほぼ初対面に近い人間に、いきなりなんでこんな事まで聞かれなければいけないのだろうか。さすがにむっとした恭太は、応えずに桂から視線を外す。

「何でもいいけど、俺は。あいつ今寝不足で疲れてるみたいから、ほつといてやってくれない？」

ある意味言い分としては正しいのかもしれないが、あんたに言われたくない。恭太は内心でそう呟く。

何か、桂は恭太に反発心を起こさせる。

恭太は口を一字に引き結び黙ったまま、しかし桂に保健室に入るのを阻まれて、二人の間に緊張が走る。

「……桂？ どうかした？」

と、中から匠の声がした。ぎょっとして中を見ると、ベットから起きあがった匠が顔を出している。

「な、なんでもないよ。お前寝てろって。」

焦ったのは桂も一緒のようで、応える言葉に詰まっていた。

「てか、そこに誰かいるのか？」

様子がおかしい、と感じたのか桂に言い含められる事なく、匠はベツドから裸足で抜け出し、ドアに向かってきた。

「だれもいねーって……匠っ。」

桂の制止などどこ吹く風、ドアの所までやって来てしまう匠。ひょい、と桂の身体を避ける避ける様にして顔を出す。

「……恭太……。」

いるはずのない人間を見た、とても言いたげな顔で、匠は目の前の人物の名前を呟いた。その隣で、桂が会わせたくなかった、と言う顔をしている。

恭太は、一体何故桂にこんな態度をとられなければいけないのか、それが疑問でならなかったが、それよりも目の前の匠の方が気になった。

「窓から見てたら……アンタ、倒れるの見たから心配になって。」
「悪かったな、心配かけて。ただの寝不足だよ。」

桂に気を遣ってなのか、匠は口の端に少しだけ笑顔を作ってそういった。けれど、目は笑ってないし、そもそも恭太を見ようとしらない態度に無理がある。

それは、一緒にいる桂にも伝わっているようで、
「ほら、心配ないってわかったろ。気が済んだら、さっさと自分の教室戻れよ。」

恭太を追い返そうとする。だからといって易々と引き下がる恭太ではない。

「先輩にこんな事言うのもなんですけど。」
そう、言い置いて。

「なんでそこまで言われなくちゃいけないんですか。海野先輩に帰れて言われるならともかく、桂先輩に言われる筋合いは無いと思うんですけど。」

「んだと？ お前なあ……。」
「待ってよ、桂っ。」

険悪になった二人を、匠が止めた。

「恭太も、やめろって。二人とも、悪いけどちょっと俺ちよっと寝たいから、一人にしてもらえる？」

他でもない恭太にこう言われてしまえば、二人とも従うしかない。

匠は桂を保健室から押し出すと、ドアを閉じてしまった。
残された二人は、しかしすぐにその場から立ち去らない。

「お前、匠をあんまり振り回すな。」

先に口を開いたのは桂だった。ただし、中の匠に聞こえないよう、小さく低い声で。

「どつという意味ですか。」

「とぼけんな。あいつの寝不足の元凶、だろ、おまえ。」

はつきりきっぱりと桂は言い張るが、恭太にはなぜそう思われるのかさっぱり理解できない。昨日の事を、匠が吹聴しているとも思えないし、憶測だけで言ってるのであれば、とぼけておくに限る。

「俺が……？なんでそんな事思うんですか。ただの後輩ですよ？俺は。」

「お前なあ……っ！」

関係ない、としらを切る恭太を、桂は正面から睨み付けた。恭太の方も負けてじと睨み返す。

しばらく睨み合った後、桂が溜め息をついて視線をはずし、保健室を振り返る。

「ただの後輩、か……。」

「そうですよ。そういう先輩こそ、海野先輩とどういう関係なんです？」

恭太は一番の疑問を桂にぶつける。しかし桂は応えなかった。

「本当に、自分がただの後輩だっと思うなら……おまえ、匠のそばから消えろ。」

そう言つて、もう恭太の方を見る事もなく去っていつてしまう。

「ワケ、わかんねえ……。」

残された恭太は、頭を抱えた。それくらい、桂の態度は謎だった。

昼休み。恭太は昼食もせずに屋上に向かった。授業中に倒れた匠の体調を考えれば、最低限食事くらいはとるだろう。であれば一人で待つ事になるが、それでもかまわない。

落ち着いて昼食などっていられる精神状態じゃなかった。

朝は行きたくない話を聞きたくない、等と思っていたが、今はそんな事言っていられない。寝不足だったと言うけれど、本当に大丈夫なのか、体調は少しでも良くなったのか、それを早く確認したかった。

そして、桂という男との関係も。

階段を上りきると、屋上へ行く扉の横にある窓に手をかける。

本来であれば立ち入り禁止の屋上で、通常は扉には鍵がかかっている。が、その横にあるガラス窓は引き戸になっていて、ちよつといじるだけで窓がはずれるようになっていた。それを利用して屋上に出る事を、恭太に教えたのは一足先に高等部に入っていた匠だ。恭太は慣れた手つきでガラスを外すと、窓枠に飛び乗った。人一人や々と通れるような隙間を抜けて、屋上に出る。

そこにはすでに、匠の姿があった。

金網に寄りかかり、校庭を見下ろしている。恭太はすぐに声をかけず、その姿を見つめた。

一八歳、と言う歳にしては華奢な後ろ姿。初めて会った時から、身長も体重もあまり変わっていないように見える。

しかし匠はその身体に似合わず、パワフルな面も兼ね備えている。自分の気が向けば何でも全力投球だから、文化祭や体育祭等といったイベントの時は、必ず先頭切って仕切っていた。

適当に、周りに文句言われない程度に手を抜いて、できるだけ楽しようとすると恭太とは何もかもが正反対だ。

欲しいものは欲しい。けれど、欲しいものを手にするためには努力を怠らない。

欲しいものは諦めるもの。そんな風にして大概適当に諦めてきた恭太には、匠の事がまぶしかった。

要領が良くて、何も手に入らない。

匠を見ていると、それに気付かされた。

『欲しい物は欲しいって言っている。』

匠に言われた言葉。その言葉は魔法の呪文のように、恭太の中に残

って響いた。

よく考えれば、恭太にとってどうしても手に入れたいものなんて、無かったのかもしれない。横から妹や他の人間にとられても諦められる程度の執着。

欲しいと思えば、手に入らなかった時にがっかりするから。最初から無いと思えばいいと、そう思いこんで。

そんな恭太が、初めて、欲しいと心から望んだもの。それが、恭太の存在だった。

どんな関係でもいいから離れたくないと。

そんな事を考えながら背中を見つめていたら、気配に気付いたのか、匠が振り向く。

「来てたなら、声かければいいのに。」

朝の激情とはうってかわって静かな声が響く。

「……早かったけど、飯は？」

問いかけられて、恭太は首を横に振った。

「俺も。なんか喉通らなくて。」

アンタに早く会いたくて。そう、恭太が言ってしまうたら話は早かったかもしれない。けれど、その言葉を口にできるほどには、まだ恭太も素直ではなかった。

「……寝不足、平気なの。」

「ああ、気を失って少し寝たから平気。」

「……俺のせい？ 寝られなかったのって。」

恭太の問いに、匠は瞳を伏せる。

「なんでそう思うわけ。」

「……俺が、昨日あんな事言ったから。」

「あんな事……てなに。」

そう聞き返されて、恭太は口ごもる。

「無かった事、なんじゃなかったのか。お前が、そうしたいんだろ？」

「そう、だけど……。」

それでも、倒れる姿を目の当たりにしてはそうも言っていられない。
「だいたいさ、お前どういふつもりなの。」

「え……？」

「どういふつもりで言ったの、あんな事。」

匠は真つ正面から聞いてくる。

そんなの、好きだからに決まってる。

そう思いながら、即答できない恭太。けれど黙っていれば、誤解されるばかりで。

「冗談じゃないって言ったよな。からかってるわけでもないって。ならなんで言ったんだよ。言ったすぐに、無かった事にしろって言う程度の気持ちなら、始めから言わなきゃいいだろ。おまえ、こっちの気持ち全然考えてない！」

言われた言葉は、ほとんど想像したとおりのものだったけど、最後の一言が胸に刺さる。昨日のあの告白は確かに、自分の気持ちを吐いてしまいたいという自己中心的なものだった。

「ごめん……。」

「別に謝って訳じゃないけど……。」

素直に謝られて拍子抜けしたのか、匠は気まずそうにそっぽを向く。再びしばらくの沈黙が流れて、次に口を開いたのは恭太だった。

「桂先輩……で、アンタのナニ。」

先輩に対しての口の利き方ではなかったが、今更そんな事を気にする匠でもない。

「ナニって……友達。」

「ただの友達が、俺の事アンタを振り回すとか、関わるとか、寝不足の原因は俺だとか、そんな事言うわけ？　ずいぶんお節介だな。」

恭太の声に、若干皮肉めいた響きが混じる。

「昨日の事、あの人に話したの。」

匠がそんな事するわけ無いとわかっているのに、妙にささくれた感情がそんな言葉をぶつけさせる。

「お前……俺の何見てるんだよ。俺がそんな事するわけ無いだろ。」
「じゃあ、ただの友達があんな口出しするくらい、付き合いが親密
って訳だ。」

こんな事を言いたい訳じゃないのに、桂と対峙した時のどす黒い感情が、匠を責めるような事を言わせる。

「……桂は、幼なじみだから……心配してるんだろ。余計な言われ
たんなら悪かったな。」

先ほどの覇気はどこへやら、奥歯に物の挟まったような言い方をする匠に、恭太はイライラする。

「別にアンタが謝る事じゃないでしょ。」

本当に言いたい事はこんな事じゃないのに。いつになく気弱な瞳で自分を見つめている匠に、恭太自身、どうしたらいいかわからなくなる。

何を言えばいいのか、さえも。

「……今、桂は関係ないだろ。」

「確かにそうですね。」

自然と。本当に自然と、匠の嫌いな敬語になる。こうなると恭太自身止めようもない。イライラしている、と言葉で表してしまう。

「……お前、ほんと訳わからねえ。」

その言葉で、恭太のスイッチが入る。

つかつか、と匠のそばに近寄ると、その両手を持って乱暴に金網へその身体を押しつける。

「アンタが……っわかるうとなんてしてないんでしょうがっ！」

「きよ……」

「どういうつもり？ そんなの、好きだからに決まってる！ 好きだから、伝えたいって思ったんだ！ 欲しいものを欲しいって言え
って言ったのはアンタだ！ だから欲しいって言った！ アンタの
事が！」

激情のままに言葉をたたきつける。

あまりの勢いに言葉を失って、ただ自分を見返してくるだけの匠。

その目を見つめていると想いが止まらなくなる。

腕を捕まえていた片手を離し、そつとその顎に手を添える。両方の手を片手で上にまとめられて、何をするのか、と匠が口を開こうとした瞬間。

「んっ……」

先ほどの勢いが嘘のような優しさで、恭太自分の唇をそつと匠のそれに重ねた。

ぎゅっとかみ締めた唇をなぞるように、恭太は唇を移動させる。触れるだけのキスはそれだけでも十分、恭太の頭をしびれさせる。けれど、身体をよじらせる気配を感じて、恭太は我に返った。

「ごめん……。」

相手の意志を無視してまで、こんな事をしたい訳じゃなかった。掴んでいた手を離して、一步、後ろに下がる。

「どうして……。」

「アンタそればっかな。」

殴られると思ったけれど、匠はただ呆然として疑問を投げかけるばかり。

「俺、ちゃんと好きだっていったよね。わかってない？」

「ちが……。」

「いいんだ、わかって無くても。俺はアンタにキスしたいし、抱きたい。そういう意味で、好きになってた、けど。」

恭太は言葉を切ると、自嘲気味に笑う。

「本当はそんな事どうでも良くて、なんか子供みたいにアンタが欲しいってそれだけで。だから、こういう事して嫌われたくない、振られるくらいならただの後輩としてでもそばにいたい。ともかくあんたから離れたくない。だから、忘れてって言った。アンタが、俺の事そういう意味で好きになるとも思ってたないから。とりあえず気持ちだけぶつけられればいいやって。それで寝不足にさせたんだったら悪いと思うけど。」

匠はただ黙って恭太の言葉を聞いている。なんのアクションもない

と言う事が、恭太を不安にさせた。さっきの行為を責めるなら、責めてくれた方が気が楽なのに。

「ねえ、ほんと、忘れてくれない？ それで今まで通り付き合えれば俺、もうこんな事言わないししないから……ってえ！」

いきなり、匠の平手が恭太の頬を叩く。

「このおーばかやろう。何が欲しいものが欲しいから欲しいって言うただけだ、だよ。お前、全然変わってない。俺がお前の言う事わかってないってんなら、お前だって俺の言う事聞こうとしてもしてない。始めから全部駄目だって決めつけて、結局手に入らないって、俺の意志なんて聞く気もないんだろ。」

「て、わざわざ振られるほどマゾじゃないって……てえっ！」

叩かれなかった頬にも、平手打ち。

「なんで振られるって決めつけるんだよ。お前は俺か？ 答え聞きもしないで決めつけて自己完結するって、どんだけ俺の意志無視するんだよ。馬鹿にするな。」

そういつて、匠は扉に向かって歩き出した。

「しばらくお前とは絶交……。」

すれ違いざま、そう呟かれて。

「い……いやだっ。」

恭太は考えるよりも先に身体が動いていた

匠の手をつかむと後ろから抱きしめる。

「嫌だってお前、子供じゃあるまいし……。」

「嫌だ……絶対……。」

子供のようにそう繰り返すしながら、ぎゅうぎゅう抱きしめてくる恭太に、匠はため息をつく。

「だからお前、ちょっと落ち着け。俺こんな事言いたい訳じゃなかったけど、今のお前相手じゃ何言っても無駄っぽいし。別に一生口きかねーとか言ってるんじゃないくて、少しインターバルおいた方がいいって言ってるんだよ。」

「でも……。」

「言う事聞かないなら一生絶交。」

そういわれて、情けない事に。本当に情けない事だが、恭太は匠を抱きしめる腕をほどいた。

「人の話、ちゃんと聞く気になったら、来いよ。それまでは、俺からも声かけないから。」

「……」

渋々ながら、恭太が無言で頷くのを確認して、匠は鮮やかに笑うと、ひらっと軽やかに窓を飛び越え姿を消す。

その後ろ姿を見送って。

「落ち着け…… たつてなあ……。」

恭太は座ると座り込むと、頭を抱えた。

「振られ男、何やってるの。」

放課後。昼休みのやりとりを考えると何もする気がおきなくて、誰もいない教室で自分の席に座りぼーっとしていた恭太に、陸上部のユニフォーム姿の清美が声をかけた。

「なんだよ、それ。」

「知らないの。みんな藤崎の言い訳なんて信じてないわよ。」

おもしろくないしね、それが本当だったとしても。そう呟く清美は、少し怒っているようだ。

「なんか怒ってる?」

恭太が聞くと、むっと眉をひそめてつかつか、と教室の中に入ってくる。

「当たり前でしょ。私が先輩に振られてるの知ってるくせに、藤崎がちやっかり告白してるなんて。無神経にも程があるわよ。」

「お前……本気だったのか。」

いくつかの会話を思い出して、恭太は少し驚いた。どちらも、あまり軽く話していたから、冗談だとばかり思っていた。

「本気よ。だから、本気で拒否られたくないから、冗談ですませたのよ。それくらいわからないわけ? それに、先輩好きな人いるみたいだもん。」

清美は泣きそうな表情でそういつて唇をかむ。嫌われたくない。その気持ちは恭太にも理解でききる。

「まあ、俺も振られたし。」

なんともごまかしようはあったけれど、清美に嘘をつく気になれなくて、そう言った恭太に、

「あんた、ばっかじゃない?」

「お前なあ……。」

「だって、嫌いってきつぱり言われたの? 先輩に。違うでしょ?」

「お前、何言つて……。」

顔を真つ赤にして言いつのる清美に、恭太は戸惑う。言われている意味が全く理解できない。

「なんでそんなに鈍いのよ？ まさか本当にわかってないとは思つてなかつたけど。中等部の頃、先輩とやたら接触が多かつた事とか、全部偶然だつたとも思つてるの？」

「つかお前何言いたいのかさっぱりわからないんだけど。」

「しんっじられない。」

深くため息をついて。

「普通に考えてみてわからないの？ 学年も違う校舎も違う、なのになんで海野先輩は藤崎と一緒にいる事が多かつたのか。あのね、言っちゃんだけどあの先輩の一般的な評価つて、藤崎が知ってるあの人とはだいぶ違うわよ？ 愛想だつてそんなに良くないし、取つつき悪いつて。それが藤崎という時だけは、すごく柔らかい雰囲気になるの。それがどういう事だか、本当にわからないの？」

愛想が良くないのはともかく、取つつきが悪い匠など想像もした事がなかつた。恭太と二人でいる時に、他のクラスメートと接触しても、決して拒否するような事はなかつたし、普通に接していたから、清美の言う事を、にわかには信じられない。黙り込む恭太を清美はどう判断したのか。

「これ以上は悔しいから言わない。振られたつていじめてたければ、ずつといじめてなさいよ。」

そういつて、足早に教室を出て行つてしまふ。ドアを、ぴしゃんと思ひ切り閉めて。

残された恭太は頭を抱えてため息をつく。清美の言葉を信じるなら、少しは自分に望みがあるのかも知れないと思える。しかし、本当に信じていいのか。単純に、乙女の妄想と言つ事もある。

「あーもう、なんだつてんだよかった……。」

匠に言われた事、清美に言われた事その他諸々で混乱しまくつた恭太は、そのまま机の上に突つ伏した。

『しばらくお前に話しかけないから。』

と言った匠の宣言は、どうやら本気だったらしい。ここ数日という物、校内で匠の姿を目にする事がほとんど無くなった。気がつけば、一緒に遊ぼうと話していた大型連休も過ぎ去っている。

唯一、体育の時間だけが匠の姿を見る唯一の機会だったが、しかしそういう時はいつだって匠の隣にあの桂がいて、それが無性に腹が立つ。やたらと親しげにじゃれ合ったりしているのを見ると、授業中にもかかわらずカーテンを閉めなくなる衝動に駆られるほどに。

こうなってみて初めて、清美に言われた事を実感する。

学年も違う相手がそうそうその辺ですれ違う確率など、そもそも低くて。しかもこの場合おそらく匠は意図的に恭太を避けていて、もしかして会いに来てくれたのだろうか、と希望的な観測を試みたりいや、それは思いがりすぎだろうと思いついてみたり。それはともかく会えない事が寂しくて、いつそ自分が3年の教室に行ってみようかと、恭太としては珍しく能動的な思考になつてみたり、ともかく感情の起伏が激しくて、自分自身でも疲れてくる。それでもいい加減頭も冷えてきた。ただただ、好きだと突っ走っていた気持ちが落ち着いて、匠の言葉を冷静に考える余裕も出てきて。

『世の中に偶然なんてそう転がって無い。』

いつだったか言われた言葉。あれだつて深読みしようと思えばいくらでも出来る。DNAの話も、そうだ。取りようによっては、恭太と匠が出会った事も運命だったと、そう聞こえる言葉。

それに、匠は絶交を言い渡す時に「一生絶交」とは言わなかった。本当にいきなり好きだと言ってきた恭太を嫌悪するならば、自分の話を聞けるようになったら来い、等と言うはずもない。

自分と会わない間きつと、桂が当然のように匠の横にいるのだ。

色々と悩みもしたし、考えたけれど、それが我慢できない。自分が、匠の隣にいたい。

あの日の噂はまだ消えていない。あれから匠と恭太が一緒にいなかったせいで、勝手な憶測までついていた。今、恭太が匠と話をするために3年の教室に行けば、さらにエスカレートするかも知れない。

けれど。

（言いたきゃ言えればいいさ。）

恭太は開き直った。終業のホームルームが終わると、速攻で教室を飛び出す。匠を、捕まえるために。

3年の教室。同じ校舎の階違いで作りも1年の物とほとんど変わらないというのに、足を踏み入れた事のないそこは、恭太にとって知らない世界のようなだった。

すれ違う上級生はどこか大人っぽくて、近寄りがたい。気軽に匠と話せていたのが不思議に思えてくるくらいだ。

だからといって臆してもいられない。匠のクラスは3年2組。まだホームルームが終わった直後、帰宅をしようとする上級生でこった返す中、意を決して教室の中をのぞく。

しかし、教室の中に匠の姿は見つからなかった。

「あの、海野先輩知りませんか。」

ドアのそばにいた上級生に控えめに声をかける。

「海野？ あーれ？ もう帰っちゃったかな？」

しかしその上級生は匠の行方を知らないようだった。

「そうですか……。」

手当たり次第聞いて回ったりしたら、目立ちすぎるだろう。ここは一旦引いた方がいいと恭太はきびすを返す。

何を言われても、もう別に気にはしないけれど、必要以上に目立

つ必要もない。

3年の教室を後にしながら、恭太は匠の行方を考える。良くいる所等はないだろうか。単純にトイレと言う事も考えられるが。もしくはすでに帰宅済みか。

と、そこまで考えて、好きだと言いながら匠の事をほとんど知らない自分に気付いた。人となりは知っている。だけどそれだけ。普段どうしているのかとか、どこで時間をつぶしているのかとか。

そんな事を知ろうとしなくても、匠の方から自分に歩み寄ってきてくれていたから、それに甘えていた。自分から知ろうとしなかった。

（よくそれで好きだと言えたよな、俺。）

自己嫌悪に陥りかけるけれど、しかしだからと言って、匠の行方を捜す事をあきらめるわけに行かなかった。最悪、家まで押しかけようと。何より、今勢いがあるうちに動かなければ、明日になったらまた足踏みしそうだった。

わからないならしらみつぶし。さすがにトイレの前で待つような暴挙に走らなかったが。

恭太は匠とあった事のある場所を手当たり次第に探す。図書室、裏庭、学食。いるかも知れないという所をいくら探しても、見つからなくて、さすがにもう帰ってしまったかも知れない、と思う。

時間はすでに最終下校時刻の30分前。特に部活をしているわけでもない匠が、学校に残っている可能性は低かった。自宅に行ってみようか。そう思いかけて、一力所忘れていた事を思い出す。

屋上だ。

ここにいなければ校内はあきらめよう。そう思いながら、恭太は窓枠に手をかける。

と、その時。

「やめろよ、もうお前。見てられねーし。」

誰かがいたらいい。どこかで聞いた声。

「別に見てってくれて言っただけだし。」

それに答えた声は、やたらと聞き覚えのある物で。そう、匠の声だった。

「かわいくねえぞ、その反応。」

「別に桂に可愛いと思われたくもないし、第一俺男だから可愛いとか言われても全然嬉しくないんだけど。」

どうやら一緒にいるのはあの、桂らしい。やっと見つけたと思ったのにお邪魔虫付きかよ、と恭太は嘆息する。桂がいたのでは、伝えたい事も伝えられない。どうしようか、と思案する間にも二人の会話は続いている。

「そこで一々男だなんだにこだわる辺りで十分可愛いけど。」

「どうでもいいよ、そんなの。」

匠の顔は見えないけれど、むっとしているのであろう事が声からもわかる。恭太は本意ながらも、そんな匠の反応を桂と同じく、可愛いと思ってしまう。

「まあどうでもいいけどな、俺は普通に女の子が好きだし。だから幼なじみがホモになるってのはいただけない。」

「なんだよそれ。」

「とぼけるなよ。あいつだろ、お前が最近やたら食欲無くしている原因。まともに食べてんのかよ、元々細いくせに。」

「余計なお世話だつて。それにちゃんと喰ってるし、言ってる意味わからねーし。」

「お前と、あの1年が付き合ってるって。噂立ってからずっと変だろ。あのガキの方は一応否定したみたいけど、お前は否定も肯定もしないで黙ってるから好き勝手放題言われてるの、知らないはず無いだろ？」

（やっぱり、何も言わなかったんだ、あれに関して……。）

多分そうだろうとは思っていた。あれを一々相手にする性格なら、あんな往来で大声であんなやりとりはしていない。

沈黙した匠に、桂がため息をつく気配。

「好きなんだろ？ あのガキが。ここしばらく離れてるだけでそんなやつれるくらい、好きなんだろ？」

「ほっとけてばもう、ほんとに……。」

言い返す言葉はしかし、弱々しい。

恭太は桂の言葉に耳を疑う。憎からず思われているとはわかっていたが、自分の存在がそれほど匠に影響するなんて思ってもいなかった。

「ほっとけるかよ。自分の幼なじみが間違った方向に行こうつてのに、黙ってられるか。わかってるのか？ 相手は男で、お前も男なんだ。いくら最近はそういう趣味の連中がおおぴらに出てきてるって言ったって、万人が受け入れられるわけがないんだ。」

押し黙る匠にたたみかけるように言う桂の言葉。

（そんなの、俺だってわかってる。）

たぶん、匠も。

「幸せになんかなれるわけないだろ。絶対一時的な気の迷いに決まってるから。やめろよ、もう不毛なだけだから。」

わかっていてなお、諦めきれない想いがある。割り切れない想いがある。

「第一あのガキあれから姿も見せないじゃないか。普段一人に執着する事なんて無い匠の口から、あのガキの名前が頻繁に出るようになったときから嫌な予感はしてたんだ。接触が無くなった今が不毛な想いから脱するチャンスだろうが。」

桂は正しい。一般論としてどうにもならないくらいに正しい。

けれど。

「桂にはわかんねーよ。」

夕暮れの屋上に、匠の声が低く響いた。

「言われた事なんて、全部わかってる。俺が男であいつが男でなくて、そんなのわかってる。わかってたって止められないんだ。理性とか正論とか、それでやめられる事なら、とっくにこんな気持ち、

無くしてる。それが出来ないから……。」

いつも強気な匠の声が弱々しくて、匠はそれ以上黙って聞いていられずに屋上へ続く窓を乗り越えた。

いきなり乱入した気配に、二人が振り返る。

「恭太……。」

いるはずのない人物の登場に、二人は呆然としていたが、しかし立ち直るのは桂の方が早かった。

「何しに来たんだよ？ お呼びじゃないんだよ、帰れ。」

匠の前に立ちふさがって恭太を睨み付ける。

「お呼びでないのはそっちでしょう。」

「何？」

「……匠の言うとおりだよ。別に男が好きない。男同士がどういふ事かなんて言われなくて良くわかってる。わかってたってどうしようもないんだ、この気持ちは。だけど。」

恭太の言葉から、自分の気持ちを知られてしまった事に気付き、真っ赤になった匠を、恭太は見つめて。

「幸せになれるかどうか、なんて他人に決めてもらう事じゃない。」

「ガキがどんな理屈捏ねようと、おれはそんなの認めるつもりは……。」

「アンタが認める必要なんて無いんだよ、桂先輩。問題は、俺と、匠の気持ち、だろ？ おれは匠の事が好きだから。」

そう言うとき恭太は桂を押しつけようと一歩踏み出す。しかしその肩を掴んで桂は邪魔する。

「好きなら、好きなやつを幸せ祈って身を引いたらどうなんだ。好きだからだけで突っ走るなんてお前のエゴだろうが。」

「匠が俺の事好きじゃないなら身を引くけど……。でも、元々誰かを好きになるなんて多かれ少なかれエゴが発生するもんでしょ。」

肩をつかんだ桂の手を思い切り振り払って。

「冷静でいられる恋なんて、どこにもないからさ。」

「鈍くてごめんね？ でも俺もずっと好きだったから。付き合ってた？」

「何馬鹿な事言って……。」

「外野うるさい。桂先輩に言っただけから。」

恭太の無礼な言い方に桂が憤慨して何かを言おうとしたとき、

「ごめん、桂。心配してくれるのはわかってる。だけど、ごめん。」
そう言った匠の言葉に、あきらめたようにため息をつく。

「しょーがねえ、今回は引いてやるよ。」

スキ見つけて別れさせてやる、と負け惜しみを言っただけで、桂は去っていく。

「匠？」

真っ赤になってうつむいたまま、動けない匠に、恭太は近づこうとする。

「寄るなよっ！」

それに合わせて一歩後ずさり、癪癪を起す。

「なんなんだよお前、この間まで人の話も聞かないで勝手に暴走してたくせに！ 何いきなりそんな余裕ぶっこいてんだよ！ 立ち聞きしてんじゃねーよ馬鹿！」

「うん、だからごめんね？」

「ごめんですむかばけ！ 何が付き合っただ、ふざけんな！ お前なんか、お前なんか……っ。」

要するに、思いもかけず自分の気持ちが恭太に知れてしまったため、恥ずかしいやらいたたまれないやらでどうしたらいいのかわからなくなっているらしい。

必死に近寄るな、と叫ぶその姿がいつもの強気な態度からは想像できなくて、でも可愛くて愛しい。

「きらいだっ！ も、お前なんてだいつきらいだっ！」

ちよつと前だったならその言葉にだまされたかもしれない。けれど、匠の気持ちを知ってしまった今、真に受ける事はない。

嫌い嫌いと呼びながら、けれど本当は好きだと、瞳が言っていた。

間を詰めようとすれば逃げる身体を、それでも強引に手を伸ばして捕まえる。それでも暴れる身体を抱き込んで。

出会った頃は変わらなかった背は、今では頭一個分、恭太の方が大きかった。長くて大きな手に抱き込まれて、匠は身動きがとれなくなる。

「ごめんね……。」

こんな風に体温を感じるのは、匠の肩を抱いて泣いたあの日以来で、緊張する。

「はなせ、って……。」

弱々しい声で匠がそう訴えてくるが、離してなんてやらない。今手を離れたら、絶対に匠は自分の物にならない。

「好き。本気で好きだから。だからごめん。匠の気持ち、全然考えて無くて、ごめん。勝手に自己完結してごめん。ちゃんと話聞こうと思って探してたんだ。」

そしたら、思いがけない真実を知ってしまったが。

「ねえ、俺の事好きだよな？」

腕の中、あきらめたのかおとなしくなった匠に、自信なさそうに問いかけると、思い切り足を踏まれた。

「いつてえ……。」

「お前ずるい。全部聞いてたくせして、今更。俺どんな顔すりゃいいんだよ。何言えばいいんだよ。」

「普通にしてよ。それで、俺に好きだって言って？」

「やだ。」

悔しすぎる。恭太に主導権をとられるなんて、いつもの強気で咳くけど、首まで真っ赤にしていたら全然迫力はない。

「……運命で、必然なんでしょ？俺が立ち聞きしちゃったのも、全部。なら、今こうしているのも運命なんじゃないの。」

いつかの食堂で匠が言った事をそっくり真似して言うと、まだ憎まれ口を叩きそうな唇を、素早くふさいでしまう。

「んっ……。」

何日か前にも振れた唇を、もう一度感じながら、少しおびえて堅く
なっている身体をほぐすような、軽いキス。角度を変えながら何度
も繰り返すそれは、少しずつ深くなる。唇の端をそつと舐めるよう
にしながら、緊張をほぐす。薄く開いた匠の唇にそつと舌を差し入
れると、一瞬びくつと身体を硬くしたが、すぐに力を抜いて。もう、
今更抵抗しても仕方ないと観念したのか、自分のそれを絡めてくる。
そんな匠が愛しくて、恭太はその唇を味わう事におぼれる。

どれくらいそうしていたのか。名残惜しげに口づけをほどくと、
匠は足に力が入らないのか恭太に寄りかかってきた。

「……俺も、馬鹿だよな。」

ぼそつと言った恭太を、匠が上目遣いに見つめる。

「この間キスした時だって、匠それについてちや怒らなかつたのにね。
気持ち悪いとか思ってたなら、パンチの一発くらいはあつたよね、絶
対。あれ考えたら、匠が俺の事好きだなんてわかりそうなもんなの
に。鈍かつたななあ……つてっ！」

もう一度思い切り足を踏まれる。

「そう言う事、臆面もなく言うな馬鹿！ あーもう、むかつく！」

「そう言う俺が好きなんですよ。」

しれつと言つてのける恭太は、やたらと余裕ありげで匠のかんに障
る。

「……キスより先、したいな……。」

不屈きな言葉を吐く恭太の頭を、今度は拳骨で思い切り殴って。

「お前こどこだと思ってるんだよ！」

「ガッコじゃなければいいの？」

「誰もそんな事言つてない！ てか、おれはお前なんか……。」

「好きだよな。」

「……………」

嫌い、と言おうとしたのに断定されて、悔しくて。

匠はぐつと腕に力を入れて恭太の胸を押すと、自力でその場に立つ。
「必然で、運命だって？ なら、俺がお前の事好きだなんて言わな

いのも、とりあえずこれ以上の事しないのも、お前の運命だ。」

主導権を取り返すべく、宣言する。

「えええええー。」

それはないでしょう、と追いすがる恭太。

「うるさい。そう、俺のDNAに生まれる前から書き込まれている。諦めろ。」

さっきまでのキスの余韻がまだ残ってる唇で、そう言い切って、匠は鮮やかに微笑んだ。

その笑顔は、恭太の大好きな笑顔で、この顔が見られるなら、しばらくはそんな運命でもいいかな、等と思ってしまう。

きつといつかは。

周りがなんと言ったって、きつと幸せになれるから。たぶん。

匠に恭太が振り回されつつも。

それすらも、必然。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0222f/>

たぶん、それすらも必然で

2010年10月10日01時30分発行